

会 報

昭和55年 6 月 5 日発行

会 長 挨 拶

富山大学にこのたび、理学部を中心として、新しく富山大学トリチウム科学センターが設置されたことは、母校の一層の発展であり、大変喜ばしいことであります。

理学部が研究・教育面において、益々整備拡充されていくことを、同窓会としても大いに期待しております。

さて、富山大学は発足して昭和53年5月に満30年を迎えたはずでした。大学全体としては何万人という多数の卒業生がいるにもかかわらず、30周年記念行事が行われなかったことは、まことに惜しいことだと思います。

8年後の昭和63年には、40周年記念行事が是非実現されることを願っております。

また、同窓会員のうち、県外に在住するものは、富山大学全体の同窓会の成立を切に望んでいます。更に、できれば、記念事業として、それぞれの同窓会員の基金による壮大な富大同窓会館を建設したいものです。

このことについては、もとよりそれぞれの同窓会全員の理解と協力及び各同窓会の連帯もまた必要なことと考えられます。そして、そのような時期が到来すれば、私達は理学部同窓会に課せられた任務を果たすべく大いに努力したいものと存じております。

以上、大きな期待と希望を述べましてご挨拶といたしますが、理学部同窓会会員各位のご健勝とご発展を心からお祈りいたします。

昭和55年5月

富山大学理学部同窓会長

平 田 卓 郎

富山大学理学部同窓会発足について

新緑の季節となりました。会員各位にはお変わりなくご健勝のことと存じお慶び申し上げます。

ところで、昭和53年1月の「会報」でお知らせしましたように、本年3月31日文理（人文・理）学部同窓会は改組されまして、4月1日から人文学部同窓会と理学部同窓会が発足しました。

また、発足にかかわる諸手続きも完了していますし、所持金（繰越金）の分配も総会が定めた方式に基づき終了しました。

更に重ねて申し上げますと、旧文理（人文・理）学部同窓会員はそのまま新しい二つの同窓会のいずれかの会員となり、また来春3月からの人文学部、理学部の卒業生もそれぞれの同窓会の通常会員となります。

以上により、事務局も一つの安心感と新しい使命のようなものを感じておりますが、併せて同窓会を発足させ、育み、発展させてきました精神も継承され得たであろうことを喜んでおります。

ただ願いますと、二つの同窓会の発足は、昭和28年4月ですから、歴史のあさい同窓会ということになるでしょう。それだけに、会員相互のつながりも今後に期待するところが大きいかとみられます。しかし、人文学部、理学部のこれからのより一層の発展とともに、二つの同窓会もまた年々会員数を増やしながら、限りなく発展してゆくことになろうかと存じております。

会員各位のご健康をお祈りしますとともに理学部同窓会発展のために旧来以上のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、別に理学部同窓会員数と本会の所持金及び理学部同窓会会則、同役員氏名等も掲載いたしましたからご覧下さい。

昭和55年6月

富山大学理学部同窓会

理 学 部 同 窓 会 の 現 況

通常会員数 1,741名

準会員数（在学生）

理 学 部	703名	} 766名
文理学部理学科	58	
大学院理学研究科	5	
（本学理学科以外の出身者）		

本会所持金

文理（人文・理）学部同窓会の分配金

1,010,538円

（文学部卒業者と理学科卒業者の会員数比率により分配）

昭和55年4月新入生入会金

870,000円

合 計 1,880,538円

◇理学部紹介

理学部学科目及び教官組織

学科	学 科 目	教 官 組 織					学科	学 科 目	教 官 組 織				
		教授	助教授	講師	助手	計			教授	助教授	講師	助手	計
数 学 科	△代数学及び幾何学	1	1		1	3	化 学 科	△物理化学	1	1		1	3
	△解析学	1	1		1	3		△構造化学	1	1		1	3
	△数理統計学	1	1			2		△分析化学	1	1			2
	△応用解析学及び電子計算機論	1	1		1	3		△有機化学	1	1		1	3
	計	4	4		3	11		△天然物化学	1	1		1	3
物 理 学 科	△固体物理学	1	1		1	3	生 物 学 科	計	5	5		4	14
	△量子物理学	1	1		1	3		△形態学	1	1		1	3
	△結晶物理学	1	1		1	3		△生理学	1	1		1	3
	△電波物理学	1	1		1	3		△細胞生物学	1	1		1	3
	△レーザー物理学	1				1		△環境生物学	1	1		1	3
	計	5	4		4	13		計	4	4		4	12

学科	学 科 目	教 官 組 織				
		教授	助教授	講師	助手	計
地球科学科	地殻構造学	1	1		1	3
	地殻進化学	1	1		1	3
	陸水学	1	1		1	3
	雪氷学	1	1			2
	計	4	4		3	11

(注) 学科目の△印は大学院修士講座を示す。

富山大学理学部
同窓会役員氏名

名誉会長 竹内豊三郎(富山大学理学部長)
 会長 平田卓郎(1化)
 副会長 石川克(1数)
 高桑昇(2生)
 常任理事 金坂績(12化)
 常川省三(12物)
 林有一(13物)
 水野透(17数)
 監査委員 関場鉄也(5化)
 近堂和郎(7物)
 理事 女川正己(1物)
 永崎晋(1生)
 堀江良郎(2物)
 可西久文(3生)
 南部睦(4化)
 柳瀬敏三(4化)
 高倉守行(6数)
 穴場敏雄(6物)
 吉川和男(7物)
 手塚昌郷(7化)
 吉田嘉文(9生)
 葛晋治(10数)
 佐藤治幸(11化)
 宮谷大作(11化)
 北野孝一(12数)
 尾島十郎(12化)
 寺田龍郎(12生)
 森克徳(13物)
 高安紀(13化)
 川田邦夫(14物)
 東軒克夫(14化)
 白石正行(15生)

理事 宮元徳子(16数)
 小川ミツ子(16物)
 立野憲子(17数)
 岡本欣司(17化)
 今泉弘之(18化)
 五十嵐昇(19数)
 小松美英子(19生)
 平内良子(19生)
 富沢彰(20生)
 辻直史(22数)
 谷内一(23物)
 池田栄雄(24数)

富山大学理学部同窓会会則

- 第1条 本会は、富山大学理学部同窓会と称する。
- 第2条 本会は、会員相互の親睦を篤くし、併せて富山大学理学部との、連絡を密にし、その発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、前条の目的を達するため次の事業を行う。
1. 会員名簿の発行
 2. その他本会の目的に適合する事業
- 第4条 本会は、次の会員をもって組織する。
1. 通常会員 富山大学文理学部理学科卒業生、理学専攻科修了者、理学部卒業生及び大学院理学研究科修了者
 2. 準会員 富山大学理学部及び大学院理学研究科に在学する者(ただし、理学部卒業生を除く)
 3. 特別会員 富山大学理学部教官及び文理学部旧教官で理事会が推薦した者
 なお、富山大学理学部及び文理学部縁故者で特に理事会が推薦した者を特別会員とすることができる。
- 第5条 本会は、本部を富山大学理学部内に置く。
- 第6条 本会は、会員の多数存在する場所に支部を置くことができる。
2. 前項の支部を設置しようとするときは、その責任者を定めて支部規定、支部会員、支部役員等の名簿とともに、本部に報告するものとする。
- 第7条 本会に、次の役員を置く。
1. 名誉会長 1名

2. 会 長 1 名
3. 副 会 長 2 名
4. 常任理事 4 名
5. 理 事 若干名
6. 監査役員 2 名

第 8 条 会長は、本会を代表する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはこれに代わる。
3. 常任理事は、本会の総務を処理する。
4. 理事は、理事会に出席し会務を審議する。
5. 監査委員は、会計を監査する。

第 9 条 会長及び副会長は、理事会において通常会員中より推薦する。

2. 常任理事は、理事会において互選する。
3. 理事及び監査委員は、総会において会員中より選出する。

第 10 条 会長、副会長、常任理事、理事及び監査委員の任期は 2 年とし再任を妨げない。

第 11 条 本会に名誉会長を置き、富山大学理学部長がこれに当たる。名誉会長は、本会の運営等に協力し、会長の諮問に応ずる。

第 12 条 総会は、毎年 1 回以上開催する。

第 13 条 通常会員は、氏名、現住所、職業及び勤務先等に異動があった場合は、その都度本部に通知するものとする。

第 14 条 会費は、入会金として 5,000 円を、入学時に納入するものとする。

ただし、準会員のうち退学により入会金の返却を申し出た者については、入会金を返却するものとする。

第 15 条 本会の事業及び会計の年度は、毎年 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日に終る。

第 16 条 本会の収支決算は、総会において報告するものとする。

第 17 条 本会の事務を処理するため事務員を置き、会長がこれを委嘱する。

第 18 条 本会の会則を変更しようとするときは、理事会の議を経て総会において決定するものとする。

附 則

この会則は、昭和 55 年 4 月 1 日から施行する。

「 会 員 名 簿 」 の 刊 行 に つ い て

かねてご案内のとおり、理学部同窓会の発足に伴い、本年は「会員名簿」の最新版を刊行すべく、既に会員各位のお手許には「現況通知票」を差し上げ、現住所・勤務先等についてご返報をいただいておりますが、会員中には現住所が変り転居先不明で回送される郵便も相当多数に及びます。

つきましては、できるだけ正確で充実した「会員名簿」を作成するためには、何よりも会員各位のご協力が必要でありますので、今後現住所・勤務先等を変更された場合には、必ず本会宛にご通知下さるようお願い致します。

なお、「現況通知票」を未だ発送されていない方は至急ご返報下さるようお願い申し上げます。

会報

第 2 号

昭和 57 年 2 月 5 日発行

あ い さ つ

会長 平 田 卓 郎

理学部同窓会のみなさま，ますます御健勝で，それぞれの分野に，御活躍のこととお喜び申し上げます。

さて，このたび，会報 2 号を，みなさまのお手もとにお送りできることは，ともに嬉しいかぎりであります。

母校の各学科も研究成果が上がり，活気に満ちて，さらに，本年度 4 月に我国初のトリチウム科学センターが開所できたという知らせも，将来の楽しい夢の一つであります。

これは未来のエネルギーについて，基礎ともなりうる研究施設であると聞いております。これらを契機として，いよいよ伸展できるよう祈念したいと思います。

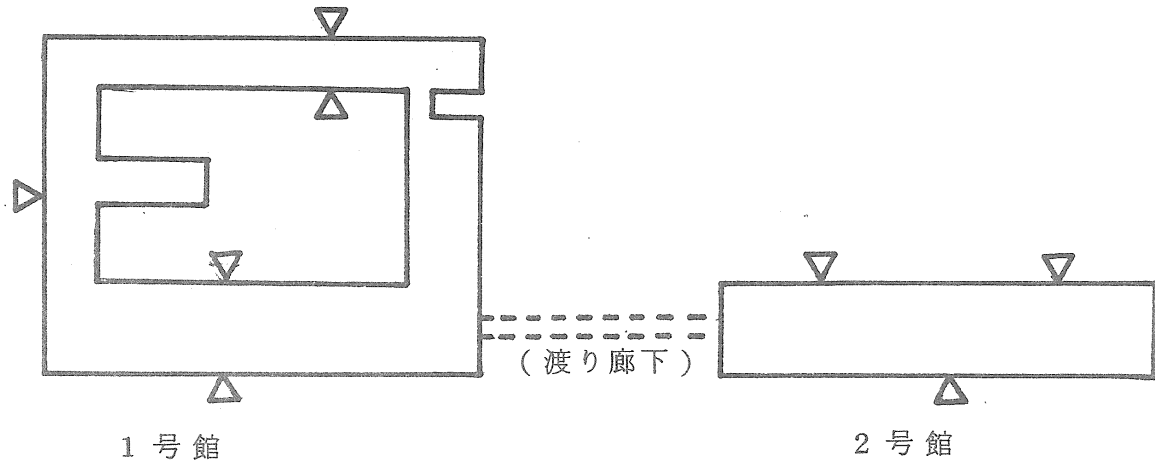
第 1 回の私達が理学科を卒業したのは，昭和 28 年で，ちょうど，29 年前の 3 月でした。その時は，蓮町の校舎で，卒業生は 27 人でしたが，卒業式の日無理学科同窓会をはじめて結成したわけであります。それから 29 年後の本年 3 月の卒業生は，大学院修士課程を含めて，200 人をこえるようになりましたことも大いなる喜びであります。

今，私は，県で高等教育機関に関係する仕事にたずさわっており，県内の大学等の整備拡充についてお役に立ちたいと願っております。

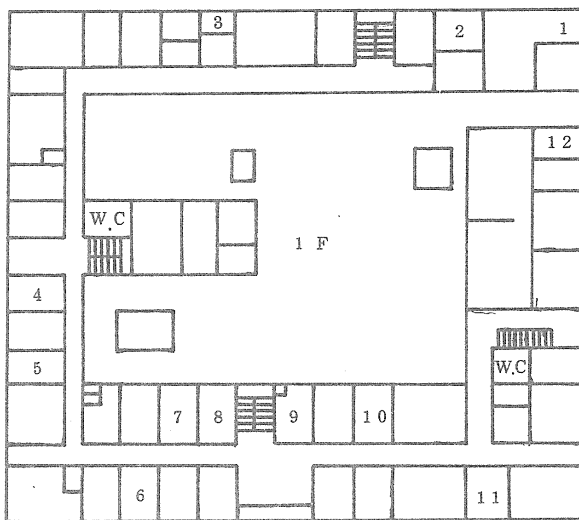
おわりに，同窓会各位の御多幸と御発展をお祈りしてあいさつにかえさせていただきます。

理 学 部 研 究 室 案 内

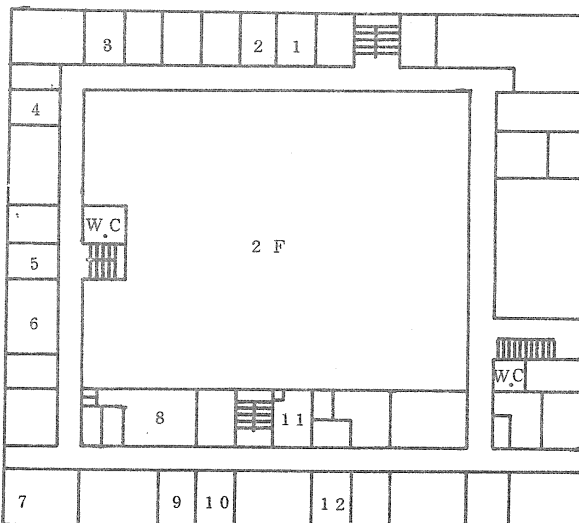
56年度理学部改装にともない、研究室等が下記のように変更しましたので御案内致します。



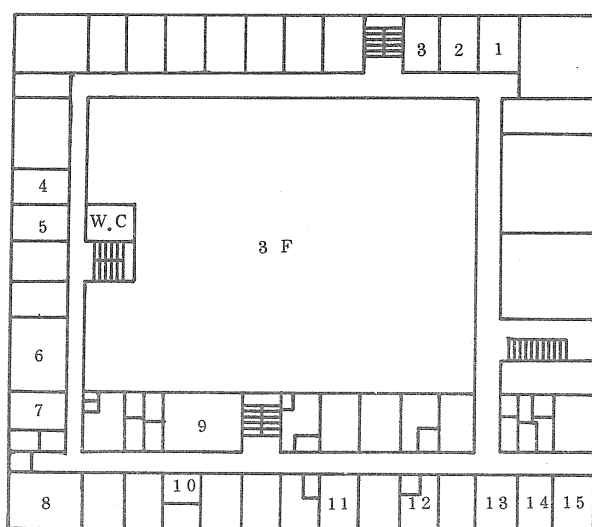
1号館



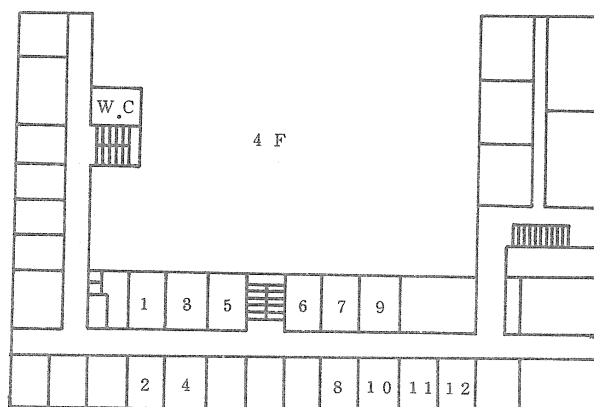
- | | |
|----------|-----------|
| 1. 金森 寛 | 7. 斎藤 好民 |
| 2. 川井 清保 | 8. 近堂 和郎 |
| 3. 金坂 績 | 9. 中島 邦明 |
| 4. 岡部 俊夫 | 10. 児島 毅 |
| 5. 杉田 吉充 | 11. 常川 省三 |
| 6. 吉田 喜孝 | 12. 高木光司郎 |
| 6. 水島 俊雄 | |



- | | |
|----------|-----------|
| 1. 波多 宣子 | 7. 南部 睦 |
| 2. 後藤 克巳 | 8. 山口 晴司 |
| 3. 田口 茂 | 9. 尾島 十郎 |
| 4. 安田 裕介 | 10. 横山 泰 |
| 5. 竹内豊三郎 | 11. 川瀬 義之 |
| 6. 高安 紀 | 12. 東軒 克夫 |

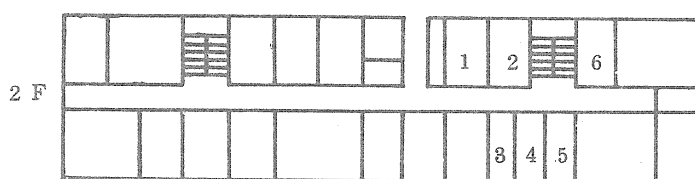


- | | |
|-----------|------------|
| 1. 松本 賢一 | 9. 菅井 道三 |
| 2. 平山 実 | 10. 野口 宗憲 |
| 3. 浜本 伸治 | 11. 道端 齋 |
| 4. 増田 恭次郎 | 12. 中村 省吾 |
| 5. 鳴橋 直弘 | 13. 笹山 雄一 |
| 6. 小林 貞作 | 14. 小黑 千足 |
| 7. 久保 和美 | 15. 小松 美英子 |
| 8. 井上 弘 | |

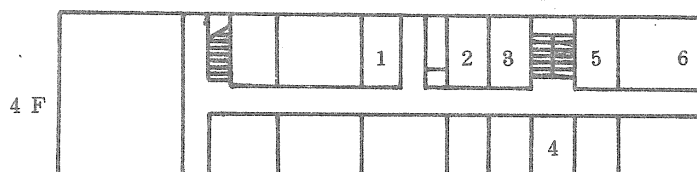


- | | |
|----------|-----------|
| 1. 東川 和夫 | 7. 北野 孝一 |
| 2. 林 有一 | 8. 関口 健 |
| 3. 風巻 紀彦 | 9. 田中 尊一郎 |
| 4. 渡辺 義之 | 10. 菅谷 孝 |
| 5. 中村 良郎 | 11. 久保 文夫 |
| 6. 鈴木 正昭 | 12. 水野 透 |

2 号 館



- | | |
|----------|----------|
| 1. 川田 邦夫 | 4. 佐竹 洋 |
| 2. 対馬 勝年 | 5. 日下部 実 |
| 3. 水谷 義彦 | 6. 中川 正之 |



- | | |
|----------|----------|
| 1. 酒井 英男 | 4. 竹内 章 |
| 2. 小畑 正明 | 5. 川崎 一朗 |
| 3. 堀越 勲 | 6. 広岡 公夫 |

理学部同窓会の現況

○通常会員数	1,907名
文理学部理学科卒業者	1,770名
理学部卒業者	130名
理学専攻科修了者	2名
大学院理学研究科修了者 (学部外出身者のみ)	5名

○準会員数(在学生)	758名
理 学 部	734名
理 学 科	19名
大 学 院 (学部外出身者のみ)	5名

富山大学理学部同窓会

昭和57-58年度役員氏名

次期役員氏名

名誉会長	竹 内 豊三郎(富山大学理学部長)
会 長	平 田 卓 郎(1 化)
副 会 長	石 川 克(1 数)
	高 桑 昇(2 生)
常任理事	葛 晋 治(10数)
	寺 田 籠 郎(12生)
	高 安 紀(13化)
	川 田 邦 夫(14物)
	高 井 正 三(21物)
監査委員	関 場 鉄 也(5 化)
	近 堂 和 郎(7 物)
理 事	女 川 正 巳(1 数)
	永 崎 晋(1 生)
	堀 江 良 郎(2 物)
	可 西 久 文(3 生)
	南 部 睦(4 化)
	柳 瀬 敏 三(4 化)
	高 倉 守 行(6 数)
	穴 場 敏 雄(6 物)
	吉 川 和 雄(7 物)
	手 塚 昌 郷(7 化)
	吉 田 嘉 文(9 生)
	佐 藤 治 作(11化)
	宮 谷 大 作(11化)
	北 野 孝 一(12数)
	尾 島 十 郎(12化)
	金 坂 績(12化)
	常 川 省 三(12物)
	林 有 一(13物)
	森 克 徳(13物)

理 事	東 軒 克 夫(14化)
	森 田 弘 之(13化)
	宮 本 徳 子(16数)
	水 野 透(17数)
	清 水 建 次(18物)
	五十嵐 昇(19数)
	小 松 美英子(19生)
	平 内 良 子(19生)
	松 山 政 夫(20化)
	辻 直 史(22数)
	水 島 俊 雄(22物)
	池 田 栄 雄(24数)
	二 宮 努(27数)
	山 田 淳 夫(29地)

富山大学理学部同窓会会則の一部変更

(会則第7条の変更)

(現 行)	(改正案)
第7条 本会は、次の役員を置く。	
1. 名誉会長 1名	
2. 会 長 1名	
3. 副 会 長 2名	
4. 常任理事 4名	4. 常任理事 5名
5. 監査委員 2名	

会 報

第 3 号

昭和 58 年 2 月 5 日発行



理学部校舎(1983年1月 左が1号館, 右2号館)

あ い さ つ

会長 平 田 卓 郎

今からちょうど30年前の昭和28年3月に、第1回の富山大学卒業式が蓮町の地で、挙行されました。当日、先生方、職員の皆さんの心からの祝福をうけながら、理学科同窓会が結成されたことを想い浮かべております。卒業人数は、全ての専攻を合わせて、27人でありました。30年後の今としては、大へん少なかったわけではありますが、卒業生も年毎に増えていき、同窓会も発展し会員の皆さんも、ますます、御健勝で御活躍のことと大慶の至りに存じます。ここに、富山県の置県百年記念の年に当たり、県は100歳、我が同窓会は30歳の壮年と相成ったわけでございます。第1回卒業生の諸兄も、はや51歳をこえております。

そこで、この記念すべき年に、本年の同窓会総会は、同窓会発足30周年記念にふさわしい行事にしたらいと、昨年夏の理事会、秋の総会で決議されておりました、母校理学部の隆昌を祈りながら、恩師の多数の御参席も得て、同窓会会員の皆さんの親交を深めたいと計画しているところであります。

同年配の同級会が、横糸の連帯であるならば、縦の年代を連ねた同窓会は縦糸の連帯であり、これらが織りなして、立派な布地や織物ができ上がるように、それぞれのすばらしい機能が新しく生まれ、伸展していくものと考えられます。

多事多難の昨今、お忙しい中にも、これらの事情を御賢察くだされ、よろしく御協力をお願いして、30周年記念総会を有意義なものにいたしたいと存じます。

おわりに、同窓会各位の御多幸と御発展をお祈り申し上げます。

ひとつの提案

名誉会長 竹内 豊三郎

同窓会は砂漠の中のオアシスの役割をしているように思われる。職場は必しも砂漠のようにひからびた世界とはかぎらないが、夢中になって歩いている場所としては似かよっている。より遠く砂漠を歩いて目的地に着くためには途中で幾度か休息が必要である。オアシスは明日また歩くための憩いの場所である。憩いだから甕に水を汲み入れ、荷を積み直し、旅人同志が力づけあいながら語って、位置を確かめ、方向を定める、広い意味の家庭でもある。このような役割を同窓会は果そうとする。

そのための事業のひとつに名簿を正確にしておくことがある。同窓会の委員は多忙の中で大きな努力を払って同窓会の皆さんへこれをとどけている。

しかし、名簿だけではお互の息が通じ合わない。上下の人は互に氏名を活字でしか知ることが出来ないからである。氏名の活字は単語であって言葉ではない。そんな意味で言葉の部分が必要である。その部分が付け加えられてもうひとつの重要な役割を同窓会が果たすことになる。昔と現在とを語りながら、将来に続く憩いとはげましの広場もあるような会報も出来るようにさらに発展することを期待して、私は次の名誉会長におゆづりしたい。

最近気になること

～竹内先生、にが笑い～

中 川 達 (第1回卒 現・上市高校教諭)

一 石神井での話

石神井と書いて、シャクジイと呼ぶ。中々読めない地名である。四十年前になるが、当時、東京に住んでいた私は、ローム層で特徴のある武蔵野の一角、大根畑の中、新装成った石神井中学に入り、毎日、美しい富士山を見て、学園生活を送っていた。しかし、時は太平洋戦争中、女子の強制疎開に会い、縁あって北陸の富山へということになる。

以来四十年、運命というか、今、東京にいる娘が何と石神井に住んでいる。先日、娘のところへ行った折、フト「わが学舎はどうなっているか」と思い訪ねてみると、日曜日だったからか、校門がしっかりと閉じてい、学校の周りには高いコンクリートの塀があり、中へ入れない。かって塀は小さな竹でできた垣根、どこからでも中へ入れたもの。農家の人が、田圃へ行くのに、運動場を通過していたくらい。私の訪れた曜日、時期が悪かったのかもしれないが、こうも学校をその地域から離していいものだろうか。最近では日曜日に生徒が忘れ物に気づき、とりに行こうとしても、学校が閉っていて中に入れなかったことが多い。これが正常の形だろうか。

二 極楽坂での話

スキーで知られている原（極楽坂として有名）へ、数年前、遠足に行った。立山線の終点、立山駅から栗巣野台地への一気の登り。体の大きいわりに、今の連中は歩くのに弱い。「ああ、疲れた！」と足をひきづっての歩き。小一時間で、極楽坂につく。「〇〇時まで、休憩、解散」と言ったところ、「こんな原っぱで〇〇時間も何をしたらいいのか」と、ブツブツ、モジ

モジ。今の生徒は、こうした大きな自然の懷で、思う存分、気ままな時をすごす方法を知らない。大川寺遊園でのような、乗物、ゲームはてはコンピューターを使つての遊びはうまいが…。私は「この辺は、かつての立山登山路にあたり、一里地藏、牛石、与四兵衛山があり、水ばしりょうも咲いてい、余裕があればゴンドラにのり、あの高い尾根道散策なども…」と指示したものの、余り関心を示さず、その辺、唯坐つての時間まちが多かったようである。

三 化学の内容について

指導要領が改正され、現在、高一から実行に移されている。ところで、昔の化学は、各論がかなり重視され、色の変化、小さな爆発などの実験に生徒の化学への興味、関心が集まったものである。しかし最近では理論化学的なものに重点がおかれ、今の化学Ⅱの教科書を開くと、しょっぱなから、1S、2S、2P…とか、SP³ 混成軌道…が出てき、これでは「化学ざらい」を多くしているようなもの。

今、理科の中で、物理・化学・生物・地学の好き嫌いの調査をしてみると、嫌いな項目には、以前は物理が多かったものが、今では化学がそれにかわってきている。いつから、こうなったのだろうか。指導要領の改正の件が気になってくる。

所で先にも述べたことではあるが、今、実施に移された「理科Ⅰ」も、大変問題があるように思えるが…。

四 竹内先生と侍日本

竹内先生が この三月に退官されるという。本当に「長い間、ご苦労さまでした」と頭を下げたい。

昔のことを考えてみると、蓮町の、あの廊下がきし

む、オンボロ校舎で、設備のない当時、工夫して実験器具・装置をつくり、こわし…また、毎日隣の工場へ液体酸素をもらいに行ったり…。総じて、苦勞の連続であった。その点、今の大学の設備は段違い。先の石神井の話ではないが、今の理学部、どこから入ったらいいのか、我々は迷う程。所で、今の学生諸君の学ぶ意気、業績はいかなものであろうか。昔にくらべ、何倍も…というのなら嬉しいが。いつの世でも、学生には、ハングリーの状態でことに臨んでほしいと思っている。

ところで、かつての竹内先生の講義は、トットツとしたもの。決して滑らかではなく、時にはしばしの沈黙、よく考えての進行ぶり。この辺に、先生の学問に

対する敬虔な態度、慎重な考え方、教え方、そして人柄がにじみ出ていたような気がする。

別れの会の時に、先生の歌われたのは何と「侍日本」
「人を斬るのが侍ならば…」。

出だしはよかったが、中程「伸びた月代」が出ず以後ウヤマヤ。最後は、それこそ歌の文句じゃないが、「新納鶴千代ならず竹内先生にが笑い」と相成った次第。

以来、三十年、先生の授業は滑らかに？いや元のまんま？。退官の時にうたわれる歌は滑らかに、今流行の「馬鹿いってんじゃないの」の「三年目の浮気」か？。いや、やはり「トットツ」とした「にが笑い」の方が先生には合っているような気がする。

◇富山大学理学部同窓会会則の一部変更

富山大学理学部同窓会会則（昭和54年11月17日制定）の一部を次のように改定する。

（現行）

第14条 会費は、入会金として5,000円を 入学時に納入するものとする。

（改正）

第14条 会費は、入会金として8,000円を 入学時に納入するものとする。

◇理学部同窓会の現況

○ 通常会員数	2,063名	○ 準会員数（在学生）	782名
文理学部理学科卒業生	1,778名	理 学 部	746名
理学部卒業生	278名	理 学 科	5名
理学専攻科修了者	2名	大 学 院	8名
大学院理学研究科修了者 （学部外出身者のみ）	5名	（学部外出身者のみ）	

◇富山大学理学部同窓会昭和57-58年度役員氏名

名誉会長	竹 内 豊三郎（富山大学理学部長）			
会 長	平 田 卓 郎（1化）			
副 長	石 川 克（1数）	高 桑 昇（2生）		
常任理事	葛 晋 治（10数）	寺 田 龍 郎（12生）	高 安 紀（13化）	川 田 邦 夫（14物）
	高 井 正 三（21物）			
監査委員	関 場 鉄 也（5化）	近 堂 和 郎（7物）		
理 事	女 川 正 己（1数）	林 有 一（13物）	永 崎 晋（1生）	森 克 徳（13物）
	堀 江 良 郎（2物）	東 軒 克 夫（14化）	可 西 久 文（3生）	森 田 弘 之（13化）
	南 部 睦（4化）	宮 本 徳 子（16数）	柳 瀬 敏 三（4化）	水 野 透（17数）
	高 倉 守 行（6数）	清 水 建 次（18物）	穴 場 敏 雄（6物）	五十嵐 昇（19数）
	吉 川 和 雄（7物）	小 松 美英子（19生）	手 塚 昌 郷（7化）	平 山 良 子（19生）
	吉 田 嘉 文（9生）	松 山 政 夫（20化）	佐 藤 治 作（11化）	辻 直 史（22数）
	宮 谷 大 作（11化）	水 島 俊 雄（22物）	北 野 孝 一（12数）	池 田 栄 雄（24数）
	尾 山 十 郎（12化）	二 宮 努（27数）	金 坂 績（12化）	山 田 淳 夫（29地）
	常 川 省 三（12物）			

◇事務局だより

- 昭和57年8月28日(土)午後2時から、理学部会議室にて理事会が開かれ、58年度からの会費値上げの件および理学部同窓会創立30周年記念行事の件について協議が行われました。
- 同11月13日(土)午後1時半から高志会館にて総会が開かれました。58年度から会費を8,000円に変更することおよび同窓会創立30周年記念行事を行うについての事務局原案が可決され、行事の今後の計画についても意見の交換が行われました。次いで懇親会に移り、元理学部教授、柴田万年先生をお迎えして、先生の教育および研究生生活の思い出を話して戴きました。真摯な一学究の目を通して、さり気なく、しかもこの上なく暖い心で語られた戦前、戦中、戦後の時の大きな流れ世相の移り変わり、学生気質、研究者気質など深く胸をうつものがありました。

- 総会の準備には、事務局の不手際があって案内状発送前に講演者がきまらず、講演者ならびに会員の皆様方に多大の御迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。
- 創立30周年記念行事は58年度の総会を兼ねて『30周年記念総会』とすること、および記念出版物を発行すること、この二つになりました。実行の細目については計画中ですが、記念総会開催は出来るだけ多くの会員の出席し易い8月中頃を予定しています。多くの皆様方の御出席を心から願っています。また出版物についても、改めて原稿をお願いする予定ですが、多くの方々からお寄せ下さることを願っています。なお、記念行事とは別に、58年度は名簿発行の年にもあたります。その都度、会員の皆様方へは案内状、連絡等を差上げることになると思いますが、その折にはよろしくお願い申し上げます。

－ 30周年記念出版編集部からのお願い －

会員の皆様方から、学生時代の思い出の写真(特に蓮町時代)や、心に残るエピソード等を募ります。提供戴いた写真等については、出版物が出来上がり次第お返し致しますので編集部宛お送り下さいますようお願い申し上げます。送先、問合せとも下記へお願い致します。

送先 〒930 富山市五福3190
富山大学理学部同窓会
30周年記念出版編集部
TEL 0764-41-1271内線(219) 永川
291

編集後記

今年は同窓会30周年記念行事が企画されております。私たちは歴史の節目にこれまでの記憶を印し、後に続く同窓生の大きな未来への飛躍台として、記録を残すことができることを光栄に思います。この機会に同窓生の皆様の印象に残る思い出・エピソード、写真等を寄稿下さいますようお願い申し上げます。今年3月、名誉会長の竹内先生には停年退官されるとのことで、ご多忙にもかかわらず、同窓生に現役最後の言葉を戴き、掲載させて頂きました。先生には長い間ほんとうにありがとうございました。

発行 富山大学理学部同窓会

〒930 富山市五福3190

富山大学理学部内

TEL 0764-41-1271-(219)
291

会 報

第 4 号 昭和 59 年 3 月 20 日 発行



あ い さ つ

会長 平 田 卓 郎

理学部同窓会30周年記念式と祝賀会も去る8月12日に、第一ホテルにおいて、母校愛と友情に燃える会員の皆さんによって盛会裡に行うことが出来たことは、ひとえに皆さん方の御熱意と御協力の賜と存じ感動の至りでございます。ここに厚くお礼を申し上げます。

若い日の青春の思い出も新たに、懐かしい恩師植木・桑田・柴田・竹内・田中・藤木・川井各先生、並びに同窓会員の現職の先生方も多数御臨席をいただき、心からの祝福をうけながら、歓談のなごやかなひとときを過ごしたことも誠に意義深いことで感謝いたしております。

特に、中川理学部長から、理学部のおいたちを記録された貴重な8ミリフィルムが提供、上映され、一同は30年の歴史の回想に深い感激をおぼえました。

当日の総会においても、同窓会30年の歴史の節目にあたり、「同窓会30周年誌」を会員名簿を含めて刊行することが決議されております。費用もかさむことでありましようが、会員の先輩・後輩相互の連帯と協調を深める必要からも、母校理学部の発展のためにも、今後の一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。かんたんですが、あいさつにかえさせていただきます。

パソコンアレルギー－脱出

寺 田 龍 郎 (第12回生物卒, 現富山工専助教授)

先日の後期中間テスト中の事である。電卓持込み可の化学テストで、電卓を巧妙に使ったカンニングが発覚、2名の学生が処分を受け、我々教官も十分に注意して監督を行なうようにとの指示があった。…が、半数以上の先生方は、カンニングを考えた学生も偉い者だし、それを発見した先生もたいした者と感心するだけで、電卓・ポケコンの区別もつかず、何故電卓でカンニングが出来るのか解らない。最近では、スーパーでも、2千円も出せば立派な電卓が手に入り、ソロバン替りに、又時計にストップウォッチにと重宝しているが、その上カンニングペーパーとして使用出来るとは……。腕時計で計算機付きのものが出始め、テストには持込ませぬようにとの伝達があったのは、たしか5～6年前のことである。

我々、学校を出てから20年もたった者にとっては、近年の電子産業の発展には驚くばかりである。パソコンショップや、デパートのパソコンコーナーに小・中学生が群がり、キーボードを上手に打ってプログラムを操作したりゲームをやったりしている光景を見て見ぬふりをして、避けて通っているのが我々パソコンアレルギーの中年達ではなからうか……とも言っておれない!! 自分の子供達も、マイコンショップに出入りしているようである。

パソコンは、どんな仕事がどれくらい出来るのか? 実際に使ってみなければ解らないではないかと、遅ればせながら、物珍しさも加えて、我が室にも用意した次第である。用意すると言っても、全く知識のない小生、どんな機種やどんな周辺機器を選択すればいいのか等々……。その道のベテランの同僚に、安価でという条件で、一応フルシステムで選んでもらった。何しろ、購入動機が軟弱。「パソコンは、自動車の運転と

同じで、原理構造が解らなくても、実際に操作すれば動くものであり、プログラムをどんなにメチャクチャに操作しようと、機械自体は故障することはない。」との、心強い同僚の言葉に乗せられたまでのこと。

このような次第で、先日最新モデルのパソコンが我が研究室に来たのである。何しろ、最も身近な所に設置した方が良いと思い、自分の椅子を180°回転するだけでキーボードに手が届くようにセットし、スタンバイOK!!

さて、パソコンのフルシステムと附属の3冊のマニュアルを前にしてみると、どこから手を付けて良いのやら……。しかし、今さらそんなことは言っておれない。小学生達に倣ってテレビゲームから始めることにした。「アルフォス」「倉庫番ゲーム」と、ゲームソフトが次々に学生によって持込まれ、彼等の指導よりしくゲームの腕前も上がってきた。自分でキーボードを打って、サークル、ペイント命令ではじめて描いた「日の丸」「オリンピックの五輪のマーク」。サウンド命令でパソコンの小さなスピーカーから流れ出した「聖者の行進の二重奏」、感激!! 計算はもちろんのこと、音楽・絵・仕事etc、忘れられない喜びが次々に現われてくる。たった10行くらいのプログラムでも、忠実に仕事してくれるパソコン。実際に操作してみても、毎日10分でも20分でもと、キーを打っている。ワープロとしての機能も、無限の可能性があると思われる。目下、文献整理・試験問題のファイル等、フロッピーとワイドの24ドットのプリンターをフルに活用することを考え、夢を追っている。家にも、子供達と女房の遊び道具として、パソコンが仲間入りした今日此頃である。

アメリカ合衆国滞在の思い出

— 案ずるより産むが易し —

森 克 徳 (第13回物理卒, 現富大教養部助教授)

1981年8月26日から1983年4月26日まで、アメリカ合衆国ワシントンD.C.にあるアメリカン大学物理学教室のキャレン教授から客員研究員として招聘を受け、家族とともにアメリカ東部の生活と研究を体験しました。後を振り返り感じたことなど思い出すまま簡単に記してみたいと思います。滞在を終えた現在感じていることは、副題にある“案ずるより産むが易し”ということです。

アメリカン大学にいく一週間程前、すなわち1981年8月19日より8月25日まで第16回低温国際会議がロスアンジェルスのカリフォルニア大学(UCLA)で

開催されていました。この会議に講演することになっていましたのでアメリカン大学に行く途中1週間このUCLAに滞在しました。UCLAの総長室があると言われている立派なロイスホールの大講堂で開会式がありました。この大講堂の正面上方の大理石の壁に大きく“Education is learning to use the tools which the race has found indispensable.”と刻み込まれていたのが印象に残っています。ロスアンジェルスは年間を通して雨量が少なく、UCLAのキャンパスや街のいたるところでスプリンクラーが作動しているのが目立ちました。

アメリカン大学は富山大学の人文、理学、教育、経済を合わせたような小じんまりとした私立の大学で、キャンパスの広さも富山大学とほぼ同じ位の規模とされます。物理学教室は、7人の教授と数名の講師および秘書1名から構成されています。私を招いて下さったキャレン教授は磁性理論の大家で、私には実験を担当させ協同研究を行おうというものでした。研究テーマは“磁歪測定による希土類化合物の磁性の研究”です。幸いなことに研究が軌道に乗るのも早く、また順調に進んだので、春・秋のアメリカで開催された磁気国際会議のそれぞれに講演発表できるという幸運に恵まれました。今振り返ってみるとまさに“案ずるより産むが易し”と感じるのです。

さて、アメリカン大学物理学教室の一つの目玉は教室として週末の毎週金曜日の午後4時半頃から夜遅くまでピンポンパーティを主催していることでした。教授3～4名と美人秘書のフローレス嬢が常時参加され、それに学生（物理学専攻の学生とは限らない）が加わ

るというものです。試合はダブルスで行なわれ、初心者、ベテラン誰でも大歓迎となっていました。このパーティの目的はピンポンを通して教官と学生の交流を計るものであることがすぐ判りました。もともとピンポンの好きな私に加わりましたので一層活気のある楽しいものになったように思われます。私はたちまちにして物理学教室のチャンピオンにのし上がり、腕に自信のある学生ペアをバッタバッタと負かしたので注目を浴びることになりました。以来学生達から尊敬の眼差しをちょっぴり受け、また試合では学生達も発奮するので真剣さも加わり、おおいにこのパーティは沸いたものです。研究教育の合間をぬってこのようなパーティを催すことも学生達の考えや悩み事など知る上に役立っているものと思われ、私の勤務している富山大学教養部物理学教室でも実現できないものか考えているこの頃です。これも“案ずるより産むが易し”かもしれせん。

◆ 理 学 部 同 窓 会 の 現 況 (昭和59年3月10日現在)

○通常会員数	1,943名	○準会員数(在学生)	803名
文理学部理学科卒業者	1,778名	理 学 部	750名
理学部卒業者	161名	大 学 院	53名
大学院理学研究科修了者 (学部外出身者のみ)	4名		

◆ 昭和59—60年度 富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長	中 川 正 之 (理学部長)				
会 長	平 田 卓 郎 (1化)				
副会長	石 川 克 (1数)	高 桑 昇 (2生)			
常任理事	清 水 建 次 (18物)	小 松 美英子 (19生)	松 山 政 夫 (20化)	水 島 俊 雄 (22物)	
	池 田 栄 雄 (24数)				
監査委員	関 場 鉄 也 (5化)	近 堂 和 郎 (7物)			
理 事	女 川 正 己 (1数)	永 崎 晋 (1生)	堀 江 良 郁 (2物)	可 西 久 文 (3生)	
	南 部 睦 (4化)	柳 瀬 敏 三 (4化)	高 倉 守 行 (6数)	穴 場 敏 雄 (6物)	
	吉 川 和 雄 (7物)	手 塚 昌 郷 (7化)	吉 田 嘉 文 (9生)	葛 晋 治 (10数)	
	佐 藤 治 幸 (11化)	宮 谷 大 作 (11化)	北 野 孝 一 (12数)	奥 井 健 一 (12物)	
	常 川 省 三 (12物)	畠 山 豊 正 (12物)	尾 島 十 郎 (12化)	金 坂 績 (12化)	
	寺 田 龍 郎 (12生)	林 有 一 (13物)	森 克 徳 (13物)	坂 井 徹 (13化)	
	高 安 紀 (13化)	川 田 邦 夫 (14物)	東 軒 克 夫 (14化)	中 村 優 子 (14化)	
	森 田 弘 之 (14化)	坂 井 純 一 (15物)	村 井 忠 邦 (15物)	赤 壁 節 子 (15化)	
	水 野 透 (17数)	佐 野 明 美 (17化)	篠 田 操 (17化)	小 川 宏 文 (18生)	
	五十嵐 昇 (19数)	上 山 勉 (19化)	平 内 良 子 (19生)	高 井 正 三 (21物)	
	田 村 一 郎 (21物)	辻 直 文 (22数)	芦 田 完 (26化)	二 宮 努 (27数)	
	佐 伯 る み (27化)	三 宅 均 (29化)	山 田 淳 夫 (29地)		

◆事務局だより

○昭和58年5月14日(土)午後2時から理学部会議室にて理事会が開かれました。理学部同窓会創立30周年記念事業について長時間の協議がなされ、特に記念祝賀会について検討が行われて方針がまとまりました。

○6月18日(土)午後2時から理学部小会議室で第2回理事会が開かれ、祝賀会当日の運営その他について協議が行われました。

○8月12日(金)富山第一ホテルにおいて午後2時から総会が、次いで3時から祝賀会が開催されました。総会では定例の議事に引続いて創立30周年記念誌の発行に関する審議がなされ、承認されました。3時からの祝賀会では来賓ならびに会員からの祝辞と余興の他に、蓮町時代の貴重な記録映画が披露されました。この映画は中川正之理学部長が撮影され保存されていたもので、新制大学創設間もない頃から五福に移転するまでの文理学部の学内風景や寮生活などを記録したなつかしいフィルムです。蓮町で学生時代を過ごした人にとってさえ珍しいと思われる光景も記録されていて興味をつきないひとときでありました。このときの画面の説明役は、教育学部の藤木教授(昭和34年まで文理学部理学科で物理学を担当されていた)

が買って出て下さり本当に助かりました。実は事務局の説明担当者が、次々と写し出される珍しい光景を前にして当時の様子も分からないまま、言うべき言葉もなく困り切っているのを藤木先生に救っていただいた次第です。参加者は来賓の植木忠夫、桑田秋水、柴田萬年、竹内豊三郎、藤木興三の諸先生以下約60名で、事務局が当初目標にしていた参加者100名の線には遠く及ばなかったのは事務局の努力の足りなさとの反省しておりますが、やはり祝賀会としてはいま一つ盛り上がり欠ける感がありました。

○記念祝賀会以後何度かにわたり、会長を委員長とする30周年記念誌編集委員会が開かれ、記念誌発行について検討が続けられました。59年に入って漸くその組立てが具体的な形にまとまり、原稿依頼その他の実際の作業にとりかかっています。記念誌の内容を別紙で紹介していますので御協力下さい。

○昭和57-58年度役員は3月31日をもって任期終了になります。事務局の仕事をふりかえてみて、多々不十分な点が思い起こされますが、会員の皆様の御指導と御協力によりどうか一つの区切に辿りついた感じがします。次期役員ならびに事務局に対しても、なお一層の御協力御支援をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

編集後記

理学部同窓会会報第4号をお届けします。今回は富山工専の寺田先生(12回生物)と本学教養部の森先生(13回物理)に寄稿していただきました。両先生にはご多忙の中、ご執筆下さりありがとうございます。ところで、我が常任理事の1人である地球科学科の川田邦夫氏(14回物理)が、南極観測隊第25次越冬隊員として去る11月に「しらせ号」にて出発されました。今は昭和基地-みずほ基地を経て極点を目指し、凍土観測旅行の最中とのことです。氏のご活躍とご健勝をお祈りします。氏が帰られる来年こそは是非とも寄稿をお願いしたいものです。

発行 富山大学理学部同窓会

〒930 富山市五福3190

富山大学理学部内

TEL (0764) 41-1271 内線291

会 報

第 5 号

昭和 60 年 4 月 20 日発行



「雪紋」の発刊を喜ぶ

同窓会長 平 田 卓 郎

同窓会創立30周年記念誌として「雪紋」が発刊されましたことは、会員諸賢とともに喜びにたえません。

これも、ひとえに絶大なる御指導と御尽力を賜りました恩師先生方をはじめ、同窓会関係諸賢に対し、心からお礼を申しあげます。

この雪紋にも栖谷方無作生氏が次のように爽快によんでおられます。

「遠くにありて残雪を見る 春雷とともに去りし日々
山をくだりて大河となるも 望郷の心やまず
ここに残雪を集め雪紋となす」

富山大学の紋章も六角型の雪紋をかたちどられたものときいております。

立山連山には一年中雪紋が絶えることがありません。年間を通じ刻々変容していく遠くから眺めた立山連山の姿を忘れることはできません。

近くにありては、登山中の雪溪の紋様、里においても冬季には、天からの使者ともいわれる落下しつつある粉雪や牡丹雪、また、歩いている道路脇の雪の紋様。春ともなれば、あちらこちらの残雪の紋様を観るにつけて、雪紋をかくも意義深く想うようになりました。

この記念誌の中には同窓会および学部の30年、各学科のあゆみ、教室紹介、研究アラカルト、富山大学理学部を見る。そのほか随筆、コラム等多数の貴重な懐かしい文面・写真が掲載されており深く感謝いたしております。

この30周年記念の節目にあたり、母校理学部の発展と会員諸賢の皆様の御健勝をともに祈り申し上げます。

理学部同窓会の皆さんへ

理学部長 中 川 正 之

理学部同窓会は、本年は新卒者145人を新会員として迎え入れました。第1回の卒業生によって会が発足してから30年余の歴史を刻み、既に2000名を越す会員を擁する立派な同窓会に成長したことを心から祝福します。

私は昭和24年新制大学ができた年、蓮町の旧制高校を母体として作られた文理学部の先生となって以来、今日迄学校と歩みを共にしてきた者です。その上この文理学部の前身である旧制富山高校（7年制）の卒業生であるのでこれ以上の深い繋りはないでしょう。こんな訳で心中では大きな親近感と少々乍ら責任感をもっている者です。然し同窓会には殆ど役に立ったことがなく過ごしてきました。

これ迄の大学の30年間を振り返ってみると始めの約10年間の蓮町時代は静かで美しい自然環境に恵まれたが、研究費や実験装置は全くなく、先づは学生実験装置の手製に苦心と工夫を重ねたが学生の向学心を満足させるものではありませんでした。この時代の卒業生は40～50才台、社会では今や実質的には最も重要な役割と責任を負う年代ですが卒業当時は想像以上に苦勞をし、その後の努力で今日迄きたものと思います。

校舎が蓮町から現在の五福に移った時は恰も我国の高度の技術革新とそれによる工業・経済の飛躍的發展が始まった時で、学生数が急増し、実験設備も急速に充実し、大学の環境は一変しました。卒業生の進路も先生中心から各種の職場へと広く進出することになりました。あの忌まわしい学園騒動、石油ショック、移転や実験室の大改装等々学内外の種々の変動があって、夫々、直接間接の影響で勉学に不満な思いを残して社会に出た者も多かったに違いありません。今や大学の内

容はあらゆる面で充実して、学生にとっても学問に情熱を傾けるに十分な場となっています。然し、物の余り揃っていなかった時代に比べて消極的で逃げ腰の学生が多いように感じています。

扨て、どのような学生時代を過ごしたにしろ卒業と同時に各地に四散して夫々異なった職に就き夫々の人生を歩むことになります。そしてやがて師と仰ぐ人や真の友人を得る等よき人とめぐり会うこともできます。他方一旦各地に四散した同窓生は、学生時代の何の修飾・体裁もない裸でのつき合いを、そして共に思索し情熱を傾け錬磨した青春時代を共通してもっているで、時と共に旧交を温め気楽に語りたいと思う内在的な要求を抱いています。つまり、苦難に満ちた現代に生きる同窓会員にとっては旧友と直接顔を合わせ、心を割って大いに語り合い、或時は安らぎを楽しむ場として、又或時は精神の高揚を覚える場としての同窓会をもちたいのです。

同窓会には、このような会をもつことと、もう一つの、より基本的で重要と思われる名簿の編集・発行があります。同窓会に出席したくともその余裕がなく出席できない場合がむしろ実際には多く、従って名簿のもつ役割は重要であります。旧友の一人一人に語りかける気持ちで名前を見、学生時代の懐かしい思い出に浸って遂々思わず長時間を過ごすことはごく自然のこと。名簿にはこのような消極的役割ばかりでなく優れた恩師、先輩を思い出してそれにあやかり、或は、自らの青春時代のひたむきな情熱を再び蘇らせて明日への新しい活力に結びつける大切な役割をもっていると思います。

同窓会は多くの同窓生にとって一つの共通した精神的拠所としての大きな役割を担っています。一層の発展を祈ります。

生物学教室点描

久 保 和 美

先日、ある所用で大阪行の特急電車で久しぶりに乗ってみた。勿論、自由席である。その時、気付いた事であるが、この電車の一番うしろの車輦は禁煙車であ

った。随分と都会なみになったものだ。ぼくは愛煙家ではないが、タバコ中毒患者みたいなもので、一日に何本か吸わなければならない。そんなわけで禁煙車

は遠慮した。電車が動き出すと、新緑の世界が一面に広がって、まだ、越路に残っている自然の美しさが目に飛び込んで来た。

数日後、旅を終え、また教室へ顔を出すようになった。その時、廊下を歩いていてふと、あの禁煙車の事を思い出した。最近の教室のスタッフは、ぼくとある先生を除いて、殆どの人がタバコを吸わない。吸わないどころか、タバコのあの臭いが嫌な人もいる。ぼくは鼻がきかないから、そんな事は一向にお構いなしであるが、人によっては、その臭いがたまらなく苦痛になるらしい。学生諸君も人の子だ。タバコを吸う人もいれば、全くの未経験者もいる。その割合がどんなものかよく判らないが、去年あたりから、教室の学生諸君は、廊下の、ある特定の場所でタバコを吸うようになりだした。研究室でのタバコは御遠慮下さいという事らしい。

研究室から追い出された、タバコを吸う学生諸君は、致し方なく吸いがらのある所へ自然と集まってくる。二、三人がたむろする時もあるし、一人で立ったまま、タバコを吸いながらうつろな目で、ぼんやりと空を眺めている人もいる。時には廊下に足を投げ出して、少し疲れたような顔で、けむりを吐き出している人もいる。

こんな姿を見ると、気の毒だとは思いますが、ぼくの部屋にいらっしやい、とまでは云えない。仕事の邪魔になるからである。

こんな状態がいつまで続くのか、考えてみると結構面白い。ぼくが定年になったら、タバコのみが少なくとも一人減って、教室のスタッフは全員、禁煙家ばかりになるかもしれない。それは教室が、あたかも禁煙車みたいになって、一路、仕事の旅路を走り続けるのかも知れない、と思ったりした。だが、北陸の自然の美しさが、教室の車窓から眺められるかどうかは、別の話ではある。

富山大学理学部同窓会創立30周年記念誌編集委員会から

昭和59年8月には、各方面の大勢の皆様方の多大の御協力を得て、無事記念誌を発刊することが出来ました。厚く御礼申し上げます。

付記

文責とか筆責とか云う言葉がある。自分が書いた文章は、たとえ、それが拙文であろうと美文であろうと、また、どんなに場違いな文面であっても、ひとつの文章を書いたからには、それなりの責任が作者に付きまとう。その責任を恐れては何も書けないことになるが、仮に、自分の書いた文章が、ある人の個人的な意向で勝手に改変され、いつの間にか、それが活字になっていたとしたら、作者はどんな気がするだろうか。ある人は、うまく直してくれたと秘かに喜ぶであろうし、ある人は、とんでもない事をしてくれたと腹を立てるであろう。人さまざまな世の中だから、“文責”そのものはそっちのけにして、自分に都合のよいように解釈するのが世の常と云うものかも知れない。また、これを逆に利用してメシを喰っている人がいるかも知れぬ。

しかし、他人の個人的な意向で文章をどのように改変しても、活字になった印刷物が作者本人の名義であれば、事情を知らない第三者に対し、作者の文責は免れない。また、作者の同意を得ないで行われた文章の改変は、人格無視と云うべきであろう。そんなバカな事が、と思われるであろうが、実際に8月に発行された「雪紋」にそれがあった。幸いな事に、作者の申し入れで、編集委員長や実務に関係のある人達がこの誤りに気づき、善処してくれた。お蔭で、ぼくは泣き寝入りをせずに、少し救われた。もう二度とこんなデタラメな事は起こらないと思うが、被害者のぼくには後味の悪い、この経験を忘却の彼方へ押しやる事はなかなか難しい。ぼくの名前で変形された作文が、消し去る事のできない活字になってしまったからである。この大きな原因は、「雪紋」発行の時間的制約の中で、校正のステップを踏まなかった点にあるが、兎にも角にも、この事でぼくも編集委員も、後でさんざん勉強させられることになった。それにしても世の中には、理由はともあれ、非常識な人がいるものだ。

富山大学理学部同窓会創立30周年記念誌

編集委員会委員長 平田 卓郎

ただ、遺憾なことに、編集委員会の不注意によって、寄稿頂いた理学部生物学科久保和美教授の原稿を、著者と連絡をとらずに一部削除調整し、当然のことなが

ら久保教授から御叱責を受けました。

時間的な制約、字数の制限等々の切迫した事態にあったとは言え、最も基本的な手続きを忘れてしまった事は、全く弁解の余地がありません。

その後編集委員一同深く反省し、また久保教授への謝罪の方法について協議致しました。その結果、頂いた原稿をそのままの形で随筆として理学部同窓会会報第5号に掲載することを決め、久保教授に申し出たと

ころ、お認め頂きました。

これによって、非礼をすべてお許し頂けるとは到底考えられませんが、せめてものお詫びとしてこの様な形をとらせて頂きました。会員の皆様方にも、この様なことで御迷惑おかけすることは心苦しい限りでございますが、何卒御容赦下さいます様お願い申し上げます。

◆理学部同窓会の現況（昭和60年4月1日現在）

○通常会員数	2,083名	○準会員数（在学生）	824名
文理学部理学科卒業生	1,778名	理 学 部	783名
59年度理学部卒業生	139名	大 学 院	41名
59年度大学院理学研究科修了者 （学部外出身者のみ）	1名		

◆理学部同窓会特別会員の異動

○採用	○転出
59.4.1 阿部 幸隆 助手 代数学・幾何学	59.4.1 日下部 実 陸水学助教授 岡山大学へ
〃 笠原 一世 助手 分析化学	59.6.1 小畑 正明 地殻進化化学助教授
59.5.1 吉田 尚弘 助手 陸水学	熊本大学へ
60.3.1 氏家 治 助教授 地殻構造学	

◆昭和60－61年度富山大学理学部同窓会役員名簿

名誉会長	中川 正之（理学部長）				
会 長	平田 卓郎（1化）				
副 会 長	石川 克（1数）	高桑 昇（2生）			
常任理事	清水 建次（18物）	小松美英子（19生）	松山 政夫（20化）	水島 俊雄（22物）	
	池田 栄雄（24数）				

◎事務局から

すでに30周年記念誌「雪紋」は大勢の方々から御購入頂きましたが、まだかなりの残部があります。御希望の方は同窓会事務局まで御連絡下さい。

〒930 富山市五福 3190

富山大学理学部同窓会 係 永川

TEL (0764)41-1271 内線 291

郵便振替番号 金沢 0-16829

発 行 富山大学理学部同窓会

〒930 富山市五福 3190

富 山 大 学 理 学 部 内

TEL (0764)41-1271 内線 291